東日本大震災 11か月

らっしゃい 仮設商店街

復興グッズは おまかせ

＊みなみまち青空市

「RE BORN」（再生）など、復興に向けたメッセージをあしらったTシャツやトレーナーなどの衣料品、ストラップなどの土産品を販売している。特に人気なのが、津波に流されなかった松の枝が竜のようにみえると地元で話題の「昇り竜」のポストカード。同店マネジャーの高橋朋広さん(31)は「昇り竜に象徴される気仙沼の元気を、全国に発信していきます」。

面影残る机 常連に好評

＊とんかつ勝子

揚げ物の香ばしい香りが迎えてくれる。とんかつなど定食がメーンだが、夜には地元産のビンチョウマグロの刺し身なども。名物女将の小野寺勝子さん(73)は「がれき跡から見つかったのは店で使っていた机2脚だけ。小上がりに置いてあり、常連さんには『昔の店の雰囲気を味わえる』と好評です」と話していた。

ご当地アイドル 特訓中

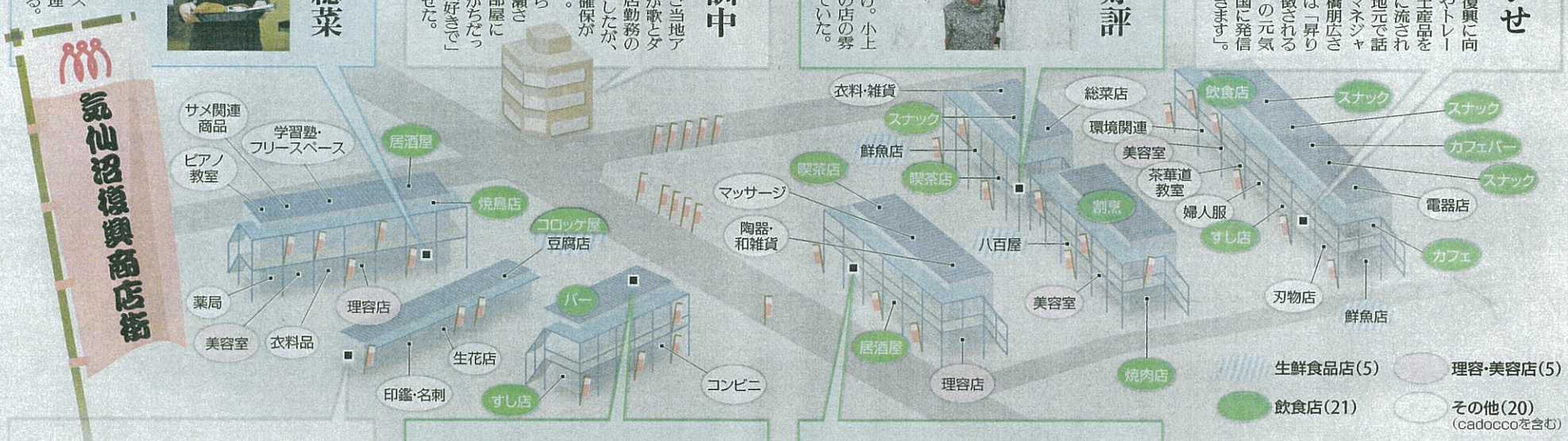
＊みなみまち cadocco

夕方、気仙沼市と南三陸町在住のご当地アイドル「SCK45」のメンバー9人が歌とダンス練習のため集まった。保険代理店勤務の阿部健一さん(49)が昨年10月に設立したが、練習場所の確保が課題だった。仮設住宅から通う高橋里瀬さん(17)は「部屋に閉じこもりがちだったが、歌が大好きで」と笑顔を見せた。

狭い台所 地元客は総菜

＊亀山精肉店

店長の柴田静佳さん(29)は「仮設住宅の狭い台所では料理しにくいのか、地元の方はお肉より、メンチカツなどのお総菜を買う人が多い」と話す。売れ筋は地元B級グルメの「気仙沼ホルモン」。ニンニクみそで味付けした豚の内臓に、ソースをかけた千切りキャベツを添えた料理で、味付けした豚の内臓を販売している。



感謝伝えるこの一品

＊菓子舗サイトウ

洋菓子と和菓子を扱い、メニューは約100種。さんまを使った「さんまパイ」や地元の観光キャラクターをあしらった「ホヤぼーやサブレー」などオリジナル商品が人気。店員の小山奈保子さん(37)は「観光客が買ってくださるほか、地元の方が、遠方の親類らに近況とともに感謝の気持ちを伝えるために贈られるケースも多いようです」。

二重負債に負けないぞ

＊DINING BAR HALU

旧店舗は開店直前に流され、仮設店舗が実質的なオープンとなった。シチューなどの洋食も楽しめるバー。市松模様の床などおしゃれな内装が特徴で、オーナーの佐藤勝徳さん(52)は「震災前に営業してなかったため、認知度はまだまだ。旧店舗と現店舗の開設で二重の負債を抱えており、店名とサービスを徐々に浸透させたい」と意気込む。

イチゴババロア待ってて

＊喫茶マンボ

50年以上続く老舗で、岩本泰子さん(67)一家が経営する。昭和40年代の気仙沼港を撮影したパノラマ写真が飾られ、往時をしのばせる。名物イチゴババロアは地元産イチゴを使っていたが、農家が被災し、現在はメニューにない。泰子さんは「イチゴババロアを提供できる日が本当の復興。それまで頑張ります」と話す。

上プレハブが並ぶ「気仙沼復興商店街」南町紫市場＝伊藤紘二撮影 下周辺にがれきが残る福幸きらり商店街＝武藤要撮影

誘客へ 子ども施設

気仙沼復興商店街 南町紫市場

（宮城・気仙沼市）

市町村の復興計画や土地の利用計画策定が遅々として進まない中、被災地では仮設商店街の出店が相次いでいる。経済産業省所管の独立行政法人「中小企業基盤整備機構」（中小機構）が建設するプレハブ店舗を利用する商店主も多い。ただ、設備をそろえるのは商店主側。震災前の負債に加え、地域の人口減少や大規模店舗との競争にも直面する。復興の起爆剤として、安定した集客が課題となっている。（松田晋一郎）

「らっしゃい。おお、元気にしてたか」。あさひ鮨の村上力男さん(70)は、のれんをくぐったなじみ客の夫婦に笑顔を見せた。

宮城県気仙沼市の中心市街地で、昨年12月24日にオープンした「気仙沼復興商店街南町紫市場」。約2000平方メートルに建てられた2階建て6棟、1階建て1棟のプレハブ施設に、被災した50店舗が出店した。その一角に商店街理事長を務める村上さんも店を構える。

あの日。住み慣れた町にがれきが流れ込む様子を、副理事長の坂本正人さん(55)は高台から声もなく見つめた。市内で一番の繁華街だった南町周辺だが、約160店舗が流失するなどした。「もうおしまいだ」。商店主らが避難した自治会館では、あきらめの声しか聞こえなかった。

市内でも被害が少ない地域では4月、果物や野菜の路上販売が始まった。「出遅れれば南町は消えちまう」。坂本さんは、いても立ってもいられず、食料品や衣類を路上販売するなど、商店街の復興に向けて動き出した。

「青空市」を始めたが、雨天には休業を余儀なくされ、「未来がない」。その頃、中小機構が開催した説明会で「土地を用意すれば、機構がプレハブ施設を建設する。原則無料で貸し出す」ことを知り、帰省客が多い「8月末」までにオープンさせる目標を定めた。

ただ、公有地には仮設住宅が立ち並び、私有地の地権者を説得して回るしかない。用地を確保しても木材やコンクリート廃材などが山積みで、連日、市や県に撤去を要請した。出店希望者が増えたこともあり、着工は10月にずれ込んだ。

一方、復興への道筋を探るため、村上さんらは6月、阪神大震災で被災した神戸市長田区を訪れ、震災後に整備されたという商店街を視察した。シャッターが閉まった店舗が目立ち、人通りもまばら。「大都市の神戸でさえ、ここまで……」。村上さんは立ちつくした。

「一時的にはにぎわうが、客足は必ず遠のく」。体験談に耳を傾けた坂本さんは「人口が減少する気仙沼では継続して人を呼ぶ仕組みが不可欠」と肝に銘じた。

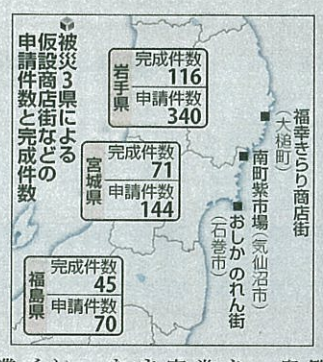
坂本さんらは帰郷後、商店街に隣接した化粧品店を改装し、子どもたちが遊べる施設「みなみまち cadocco（かどっこ）」を整備することを決めた。市内には、小中高生で作るアマチュア劇団や、海外でも公演する太鼓団体がある。「安心して練習できる場所があれば、子どもを送迎する保護者も商店街に出入りする」と考えた。

「この商店街はあくまで仮設」と坂本さん。商店主らは復興を目指して先を見据えている。

大型施設が気がかり

福幸きらり商店街

（岩手・大槌町）



「町民の知名度が低い。この先が心配だ」。岩手県大槌町大槌北小学校グラウンドに昨年12月17日にオープンした「福幸きらり商店街」で、学生衣料品店を営む山崎繁会長(63)はため息をついた。

商店街にはレンタルビデオ店や食堂、菓子店や美容室など40店舗が集まった。気がかりなのは、わずか1・5キロしか離れていない幹線道路近くで同月22日に営業再開したショッピングセンター。スーパーや金融機関、45店の専門店が入居し、同県沿岸部では最大級の商業施設だ。

ショッピングセンターに客が流れることを心配した山崎会長だが、同商店街の1月までの客足は予想を上回った。ただ、商店街に停車するバスなどの公共交通機関はなく、「仮設住宅に散ってしまったなじみ客に来店してもらえるように知恵を絞らなければならない。ライバルと共に町の復興を支えたい」と話す。

民間援助でスタート

おしか のれん街

（宮城・石巻市）

宮城県石巻市鮎川浜の仮設商店街「おしか のれん街」は昨年11月、中小機構の支援を待ちきれず、NPO法人「JEN（ジェン）」（東京）の援助でオープンにこぎ着けた。ボランティアの遠藤太一さん(38)が、現地での支援活動で知り合ったJENの今井香菜さん(31)に、商店主らの希望を伝えたことがきっかけだ。商店街の沼倉憲一会長(64)は「民間の力が結集した。遠藤さんやJENに感謝している」と話す。

木造平屋の長屋2棟。市有地に建ち、三角形の屋根が特徴だ。屋内は、幅1・8㍍の通路を挟んで鮮魚店や飲食店、美容院など計16店が並ぶ。

長屋建設費など約8000万円はJENが負担、9月下旬に着工した。JENはドイツのNGOから資金援助を受けた。沼倉会長は「やる気があって早く復興したいと思っているのに、国はあてにならなかった」と不満も漏らす。

近所の主婦の早坂裕子さん(56)は「これまでは片道1時間以上かかっていた買い物が便利になった。助かります」と話していた。（前田泰広）

プレハブ使用 2年まで

読売新聞のまとめでは、20店舗以上が集まる大規模な仮設商店街は、岩手、宮城両県で14か所建設されている。福島県いわき市では仮設工業団地の建設が進んでおり、原発事故で警戒区域になっている楢葉町や富岡町から避難したバス会社や電気工事業者など72社が入居する予定だ。

仮設施設の建設は、地元市町村が商店主らの希望をとりまとめ、中小機構に申請する。青森や茨城などを含む計6県で8日現在、小規模な商店街や工場団地なども加えると5883件の申請があり、約4割の2526件が完成した。

土地は原則、公有地だが、津波の浸水を免れた場所は少なく、地権者から長期の使用承諾を得ていれば民有地にも建設できる。プレハブは最短で約1か月で建設され、中小機構が市町村に無償貸与する。

商店主らは市町村から無償で借り受けられるものの、トイレや屋外の照明などの維持管理費を負担するケースが多い。「仮設」との位置づけのため、多くの市町村はプレハブの使用期限を2年程度としている。（石川剛）